社員の震災体験記録

大震災に遭遇して

●● ●●（道路交通技術部道路交通課）

地震が起きた時は本社14階にいました。今まで体験したことのない激しい揺れで床に座り込みましたが、何かにつかまっていないと放り出されてしまうような感じで、もうだめだ、ビルが倒れると思いました。長い揺れが収まり、ビルの外にみんなで避難して一息ついたのもつかの間、ワンセグでみた大津波の知らせに血の気が引きました。

私の地元は気仙沼です。世の中から取り残されたような町で（市ですが）、都会は住宅が増えたり、ビルが建ったり、道路が新しくなったりなど変化がありますが、気仙沼はいつ帰っても同じで代わり映えがせず、つまらないなぁと思っていました。しかし、今回の大津波で市の中心部は壊滅的な被害を受け、思わぬ形で姿を変えることになってしまいました。

気仙沼は海沿い以外には平地が少ないため、商業地は海沿いに集中しています。市内の浸水範囲は全体の5%ほどでしたが、市内に本社を置く企業だけでも7割が浸水し、支店や工場を含めるとそれ以上の被害になりました。ただでさえ燃料の値上げや減船などで市の財源は減る一方だったのに、漁船はもとより加工場や製氷工場、倉庫など一番の産業であった漁業に関する施設がすっかり流されてしまい、気仙沼は復興できるのだろうかととても心配です。まだまだ時間がかかりそうですが、はやく元の気仙沼に戻ってほしいと思っています。

東日本大震災に遭遇して

● ●●（道路保全事業部保全計画課）

まさかの出来事で未だに当日のことは忘れられません。

死んじゃうんじゃないかと一瞬頭をよぎったくらい、建物が揺れ棚が倒れてきました。

会社から歩いて自宅まで帰ったのですが、途中にみる崩れた建物でさらに不安が大きくなったのを覚えています。電気も水もない状態で、1人部屋に戻るのはとても怖かったので、先輩のお宅にお邪魔させていただきました。本当に感謝です！

私は実家が石巻なのですが、家族や友人にもまったく連絡がとれずとても心配していました。テレビでは津波の被害がひどいとの報道ばかりで悪い方向にばかり考えてしまい・・・

●●部長と●●●●さんとともに地震の3日後、石巻に行くことができ、家族の無事を確認できたときは本当にほっとしました。

母親と妹は津波に遭遇し、車は流されてしまったようです。

●●部長、●●●さんのご家族の無事も一緒に確認ができ、本当に安心しました。

●●部長、●●●さん、一緒に食べたうどん、おいしかったですね。

私は当日石巻にはいませんでしたが、実家に帰る度たくさんの人からいろいろな話を聞き、津波による恐怖は計り知れないものだったんだと思い知らされます。友人や親せきにも被害の大きかった方がいますが、みんなたくましく生活しています。見習うことばかりです。

おばあちゃんは、地震をきっかけに趣味ができたらしく、地震と津波についての新聞記事の切り抜きを収集しています。帰る度に見せられて困ってます＾＾；

社員の震災体験記録

●● ●●（古川事業所）

今回の巨大地震発生で、古川では地震直後からライフラインが復旧されるまで、一部のNEXCO職員、エンジ職員は家族を管理事務所の仮眠室等へ避難させておりました。我々、エンジ古川事業所も緊急点検、路面確認、復旧工事立会いと緊急交通路確保へ向けそれぞれが休みなく対応に追われ奮闘しておりました。
そんな中、現場から帰ってくると、避難していた職員の家族（奥様）が缶詰や少しの野菜など限られた食材を使って食事の準備をしてくれていました。「しっかり食べて頑張ってね！」とエンジ職員も朝昼夜の３食を管理事務所にお世話になり、ご飯、味噌汁、スープなど温かい食事を戴くことができてとてもうれしかったです。

また、管理事務所ではシャワーを貸して頂いたり、自宅用の飲料水も快く提供して頂いたりと大変助かりました。

復興までは長い道のりですが、私も“助け合い”の心を忘れずに頑張りたいと思います。

●● ●●（道路保全技術部橋梁・舗装課）

「ジーンときたこと」

３月12日に東北道の点検を行っているときに、
長野県と記載されている消防隊の何十台という車列を見て、心強く感じ、東北だけじゃないんだとうれしかったです。
(12日早朝に、長野でも大きな地震があったのに・・・)

「ジーンときたもの」

３月１３日だったと思います。
点検が終わって、仙台南～仙台宮城間の
太白山第二橋というOVに
誰が書いたかわかりませんが
「助けにきてくれて　ありがとう」
という垂れ幕が掲げられていて、
ジーンときて言葉も出ませんでした。
今でも、その時のことを思い出すと（＞＿＜）

●● ●●（道路保全技術部保全計画課長）

津波の影響調査のため県道塩釜亘理線を移動中、ヒッチハイクのおじいさんに出会った。

疲労困憊な様子が車中からでも伺える。「山元町に行きたい」とのこと。

避難所の七ヶ浜町を出てすでに７時間。歩けばこれから丸一日はかかるため黄パトに乗せた。

とても放置は出来ない。聞けば山元町の実家に住む兄との連絡が全くつかず、奥様の制止を振り切って出て来たらしいが無謀にもほどがある。

沿線の変わり果てた風景は徐々に希望を損ないつつある。閖上漁港や鳥の海付近が特にひどい。おじいさんの実家は海岸線近くにあり、近づくにつれ多数の自衛隊員や押し流された貨物列車を目の当たりにし、想像が確信に変わってしまった。案の定実家は基礎を残し全て無くなっていたのだ。

その時のおじいさんの顔は一生忘れないと思う。さながら野戦病院状態の町役場の前で「気を落とさずに、体に気を付けてください」と言うのがやっと。
そんな人が何万人もいるんだ！

●●● ●●（仙台電算室）

利府から宮城ＩＣまで自転車通勤した事

私は普段勤務地の宮城ＩＣ(電算室)へ利府の自宅から自家用車で通勤していますが、地震発生後はガソリン補給が極めて困難となり、何度か並んで入れようとした中で最大で11時間並びながら在庫切れで入れられず、更にＪＲは運休でバスでは勤務時間に間に合わないため、最終手段として自転車通勤をしました。

自転車で長距離(約33km)を乗るのは大学の通学以来実に30年ぶりで、運動不足に加えて出発した午前６時は雪の凍結路面という最悪のコンデションで、坂道では歩いて移動し体力の限界を感じながら執念でこぎ続け、３時間後にようやく着く事が出来ました(帰りからは乾燥路面と体が慣れてきて２時間程度で走破)。